

## 『INCHの楽しい仲間たち』 vol.8 その2

## スコットランドヘウイスキーを飲みに (2)

佐伯 順弘 (岐阜県)

2012年8月。台湾高雄に赴任していたときの夏休みに、初めてスコットランドを訪れた。

その話は前回書いたが、今回はその続きである。前回の原稿では地図が近くにあると楽しいとのコメントをいただいたので、地図を載せたいとも思ったのだが、著作権をクリアできるのかわからないため、載せることを断念。お手元に地図帳をご用意の上、移動状況を確認しつつ、読んでいただければ幸いである。

さて、前回の続き。グラスゴー国際空港からロンドン・ルートン空港へ EasyJet で飛ぶ。到着後、ルートン空港をしばし探索。ロンドン近郊にあるこの空港はロンドン中心部から約 50 km 離れており、LCC が 10 社ほど乗り入れている小さな空港である。しかし、スタバの他、Nero や Costa などカフェも多く、快適に過ごすことができる。ロンドン中心部へはバスと列車を乗り継いで行く。ふとスタンドをみると、以前から食べてみたいと思っていたコーニッシュパイがあるではないか。



(これがコーニッシュパイ。)

これはミートパイといった感じのもので、これがまたうまい。くどいが、どこをどう切り取れば、イギリスの食べ物がまずいという結論に達するのか理解できない。ここでふと考える。自分は今までまずい食べ物に出会ったことがあったのだろうか。あるといえばある。確かに中国では時々とんでもない地雷を踏んだことがある。しかし、それよりも多い

のは、圧倒的に日本なのである。冷静に思い返してみると、世界で最も多くまずい食べ物と出会ったのは日本ではないか。日本で食べる機会が最も多いのだから当たり前だとも言える。イギリスでの滞在は長くないが、今のところ、まずい食べ物には1つしか出会っていない。某有名コーヒーチェーンのカフェラテである。あれはまずかった。何か薬物でも混じっていたのかもしれないというレベルのまずさだった。もちろん、食べ物について「まずい！」と口にするのはまずくない。どれほど口に合わなくてもありがたくいただいている。食べ物についてまずいなどと口にするのは、修行が足りないからであり、基本的に下品な行為なので、思っても言わない。



(鉄道駅まで乗ったバス GBP1.5≒¥450)

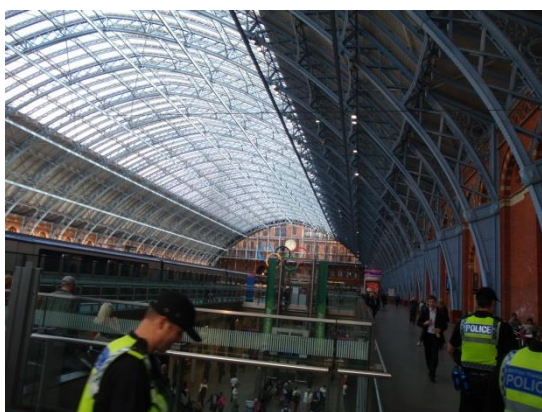
さて、コーニッシュパイを楽しんだ後、鉄道駅までのバスチケットを自販機で買い、早々にバスに乗り込んだ。どうして、海外のバスはこうも快適なのだろうか。日本のバスとは大違いである。あの砂漠の中を走った埃だらけの中国の深夜バスでさえ、さらには内戦が3日前に停戦合意された時に乗ったスリランカのトリンコマリー行きのバスでさえ、日本の観光バス、路線バスより格段の快適さである。最近では日本のバスであっても夜行バスはかなり快適になってきたようだが、それ以外のバスは快適と言えないものが圧倒的に多い。ここで日本のバスについて論っても詮無きことである。止めよう。さて、乗り込んだルートン空港から鉄道駅までのバスは

臭くない、座席は広い、座り心地が大変良い。もうそれだけで満足なのだが、驚いたことに、出発までの間、運転席近くでバス会社の人だと思われる人が、ちょっとした話をしてくれたのである。これは偶然、そういう人に当たっただけかもしれないが、必死に聞く困難さを差し引いても、楽しかった。「それじゃ、出発するよ。」とその人は言った。なんと、そのバスの運転手だったのだ。身も心も快適な状態でバスは出発した。駅までのそう長くないバス旅だったが、楽しい時間になった。



(ロンドン中心部まで乗った列車。)

その後、Luton Airport Parkway station からロンドン中心部 St.pancrase station まで列車にのって約30分。



(駅構内はこんな感じ)

St.pancrase station についたら、頭の中に入れていた地図に従い、Generator hostel にたどり着く。学生の頃から心がけていたが、道端で地図を広げるなんて間抜けなまねはしないし、ましてや「歩き方」を広げるなどという恥さらしなまねはしない。どうしてもというときは、カフェに入って、さっとチェックするだけ。地図やガイドブックを広げないことは安全確保の基本である。

めざすホステルに無事到着しチェックイン。この Generator hostel はその後ロンドンでの定宿となっていくのだが、前回も書いたように夜中～朝方にクラブ帰りであろう若者がへべれけで帰ってくるところが退廃的でいかにもステレオタイプなロンドンのイメージそのものを体現しているような場所である。部屋は男性用ドミトリー。2段ベッドが5つの10人部屋。各個人が場をわきまえているのだろう。適度に片付けられていて不潔な感じはない。シャワー・トイレは、部屋の外で共用。朝食も安く食べられる。何一つ不自由はない。快適な宿である。



自分のベッドを確認し、荷物を整理したらサブザックを背負って街へ出かける。こちらで合流することになっているオリンピックフリークの旅仲間に出会うためだ。

まずは地下鉄駅に向かい、オイスターカードというものを買う。日本でいうところの suica などの交通カードである。



(地下鉄は路線によって狭いものもある。)

ロンドンの地下鉄は東京のそれよりも若干わかりやすく利用しやすい。思ったよりも簡単に旅仲間と再会し、近くのパブに入る。





スコットランドヘウスキーを飲みにいったのだが、ビールを飲まないわけではない。しかもここはイングランドである（確認するまでもないが、イギリスはイングランド、ウェールズ、スコットランド、北アイルランドの4つの国で構成されている）。アイラ島ではホテルのバーで飲んでいたので、パブは初めてである。ややぬるいエールビール、そしてフィッシュ&チップスである。二次大戦でドイツのUボートがイギリスへの補給路を断ったため、フィッシュ&チップスができたのだと私が学生の頃の社会科教員が言っていた。しかし、調べてみると19世紀の中ごろには既に完成されていたことがわかった。教員は真実を語るとは限らず、個人的な間違った認識を垂れ流している場合もあるのだと思い知らされ、残念な気持ちになったものだ。しかし、そんなことがあろうとも、この素晴らしい組み合わせの価値がわずかでもゆるぐことはない。ビールがうまい、魚がうまい、そしてジャガイモがうまい。何の文句があろうか、ドン！（机をたたく音）いや、ない。そうこうするうちに夜は更け、我々はそれぞれの宿泊地へ戻っていくのであった。

ここで気づく。今朝までアイラ島にいたのだと。明日から本格的な旅の後半戦が始まる。

## DAY6

糖質が多いホステルの朝食をじっくり味わった後、King's Cross stationで旅仲間と合流。そこで、お子様方に交じって、若干恥ずかしい写真を撮る。



（シャーロックホームズ博物館）

言わずと知れた魔法少年がカートを押して壁に突っ込むシーンである。その後、地下鉄に乗り、Baker Street tube stationへ。読書家でなくとも知っているであろう。そう、シャーロックホームズに出てくる地名である。

こういうのを作ってしまうところが粋だなあと感心してしまう。中には小説に関わる展示、そして帽子を被り、パイプを持って写真を撮るコーナーまである。存分に楽しんだ後、近くの公園に行く。この公園には巨大スクリーンが何面も設置され、競技を楽しめるのだ。



（公園に設置された何面ものスクリーン）

ウッドチップが敷き詰められた地面に座り、ビールとF&Cを味わいつつ、オリンピックゲームを楽しむ。いい気分だ。しばらく、観戦した後、バックingham宮殿などの観光地を回る。

## DAY7

大英博物館へ。さすがである。世界各国からの品々がこれでもかっというくらい並べられている。全部が全部正当な対価を払って手に入れたもので



はないともいわれているが、このように整然と展示されているのを見ると、あるべきところにあるのではないかという気がしてくる。(個人的な感想であり、返還を求める各国の主張を無視しようとしているのではない。)

世界史で学んだと記憶している展示が多数あり、これは中国・西安の碑林博物館で「大秦景教流行中国碑」を見つけたのと同様の感動があった。学校の勉強が役に立つこともあるのだ。それにしても、ロンドンの人々は、この世界トップレベルの遺産に無料で接することができるなんて羨ましい限りだ。その後、パブでビールを飲みながら一休み。ミュージカルのチケットを買い、「WE WILL ROCK YOU」を見る。QUEENの楽曲が使われている作品。だいたいわかったのがうれしかった。



## DAY8

ナローボートに乗って、のんびりとアビーロード方面に向かう。ビートルズが横断歩道を渡っているジャケットで有名なアビーロードスタジオがある場所である。世界各国からのファンが来ている。落書きも多い。当然、横断歩道ではジャケットのような写真を撮ろうとする人々多数あり。夜はミュージカル「THE LION KING」を観る。話は知っているだけによくわかった。みんなすごい身体をしている。他にも見たい作品多数。やはりロンドンに来たらミュージカルは外せない。

## DAY9

公園の池で遠泳競技。公園も池もとても大きいので成り立つ。解説付きでテレビで見るともいいが、実際に見るのも楽しい。



## DAY10~14

その後、ロンドンの有名どころを観光したり、自然史博物館でダーウィンの銅像と写真を撮ったり、新しいパブを発見したりして、2週間のイギリス旅行を終えることになる。

後半はオリンピックとロンドン観光とパブの日々だった。チケットがなかったので、スタジアムでの観戦はできなかったが、公園の池での競技を観戦したり、巨大スクリーンでのんびり観戦できたりしたのはよかった。音楽フェスのような閉会式もユースホステルのラウンジでいろんな国の人と一緒にテレビで楽しんだ。文化と歴史、日本ではあまりみないほどのおもてなしの精神があふれているイギリスにかぶれてしまったのは言うまでもない。その後、3回もイギリスに通うことになるのだった。

今回は、この旅のたった4か月後、ロンドンのクリスマスとエディンバラのホグマニーを楽しみに行った話を書こうと思う。

(つづく)